

# 春燈



June 2009

6

主宰の句

安立公彦

如月や波に分かるる魚の影

風吹けば揺るるほかなし古草は

春なかば父の忌いつも風に暮れ

日のさくら月のさくらと遍しや

花十日ひともしくらも虚ろなる



# 燈下集



○ 池園二三江

地虫出てしばらく方向音痴かな  
四月馬鹿インフルエンザ鴉にも  
花冷やいつよりか身の屈みぐせ  
燕来る金物町の鉤曲り  
かくれなき海女の太腰磯の春

○ 鈴木静恵

初蝶の連れ舞ふ秩父音楽寺  
札所一番元禄の梅しだけけり  
盃かざす酒呑羅漢や春の宵  
僧形の足早に過ぐ春しぐれ  
小鹿坂も一撲の鐘もおぼろかな

○ 菊地瑩子

手を止めてはまた文を書く春の雷  
董ほどな女に生れかはりたし  
まだ遊びたき小鳥に春の雨やさし  
自転車の少女総身に風光る  
寂しかりああ万愚節なりしかな

○ 加藤良子

先祖の地に眠りたる夫風光る（金葉史）  
唐崎の松は泰然梅日和（兼六園）  
高階の小さき鉢や下萌ゆる  
故郷の城山恋ひしいかのぼり  
すすめられ喜寿のふらここゆらしけり

○ 鈴木直充

たかぞらの風の音色や春の夢

春愁やすこし薄着で町へ出づ

大福を買ひ過ぎ春の風邪ごこち

花冷の古書肆の奥の灯かな

蝶生るマーラー「大地」奏つべし

○ 高橋和女

老木の気魂の枝垂れざくらかな

花冷や千の乳鋌の田安門

危ふさの明日を待み青き踏む

突風に町青ざめし花の昼

手をついて庭の主と暮出づる

○ 上野昌子

比叡より奔り下りて春の水

枝垂桜競ふ里坊川繋ぐ

穴太積蒲公英穴に微笑むよ

強東風や隣家毀ちて即分譲

猫の欠伸吾にうつれる日永かな

○ 和田孝村

何を語らむ摩文仁の丘の菜の花黄

清明や芦屋夫人の眉匂ふ

身仕度了へ春宵の帯ひと打ちす

菜の花や潮香ほのぼの夕爾の地(鞆ノ浦)

お彼岸会丹波子鳳の地に佇てり

○ 中村喜美子

花冷や濛にこぼるる女声

槌音の律義に響く花曇

大人びて見ゆる子眩し入学す

緊張の新任教師花吹雪

よく笑ふ娘に幸あれやシャボン玉

○ 乗鞍三彦

一懸案残りしままや鴨帰る

啓蟄やとなりの留守を頼まるる

畑で食ぶコンビニ二弁当百千鳥

音沙汰のなきもまた良し遠蛙

満願の階を踏みしめ花の山

○ 柴崎 甲武信

安土なる天守の虚空揚雲雀

春雨や湖一枚をいぶし銀

堰趾や蝌蚪の集むる子らの声

若鮎の覗いて過る生簀籠

わだつみや雲が眉ひく真砂女の忌

○ 岩谷 丁字

ブルートレインのかぼそき笛や春の宵

鳥語聴く無聊の日々の春障子

猫の子の拾はれてゆく果報者

春惜しむ好みのパスタゆつくりと

四月馬鹿ピフォとアフター変りなし

○ 宇賀 令子

花八分りハビリセンター卒業す

花粉症我・犬・猿もかかりけり

春寒し単身赴任宇宙なり

百千鳥天声鳥語こちよし

傘寿・喜寿・古稀の兄弟花の下

○ 近藤 牧男

雨がちに梅の見頃の過ぎにけり

引揚者に記念日のなし鳥曇

水飲場蛇口に春の来てをりぬ

あの雲の落すあの影日の永し

初ざくら骨董市の立ちにけり

○ 吉澤 恵美子

鎌倉の海よく見えて三汀忌

木蓮の懈怠の夕日ちぎれけり

解くるかに風にこぼるる雪柳

花冷や真砂女句集を卓の上

二の鳥居三の鳥居のさくらかな

○ 卜部 黎子

陰陽の五色のサラダ抱卵期

掛花の一輪の香や利休の忌

春北斗友の平癒の十字切る

息かけても印のかするや納税期

啓蟄や電動ウォーカーの歩を延ばす

○ 卯木 堯子

摘草やミントの場所を教へらる

朧夜の吊り橋這つて渡りけり

雀より細身の鳥の巣箱かな

いつよりか消えし耳鳴り椿餅

他愛なきヤングの会話蜆汁

○ 深川 敏子

三月十日言問橋を渡りけり

春の波沖の鷗は日のかげら

甘えつ子に母の膝あるしやぼん玉

春風や雀きてゐる厨口

花菜畑夕日ゆつくり沈みけり

○ 和田 幸江

松の葉や微塵と散れる忘れ雪

国分寺の水煙茫と帰雁かな

連翹の雨の明るき坂のぼる

小児科のからくり時計春ともし

菜種梅雨膝に來し猫動かさる

○ 大室 恵美子

引鶴や天に標のあるごとし

春雨や金の雫の金閣寺

げんげ田や飛鳥の石の謎深む

豊満な土偶の胸や山笑ふ

別れ来て文をすぐ書く春灯

○ 小宮 淳子

春ざれや満月あげし法隆寺

老幹の伸びたる枝の春つかむ

戦友てふ夫婦の絆麦を踏む

哀れなり閉づることなき雛の目

佇めば鳥帰りゆく風の音

○ 尾野 奈津子

雪間草沢水小さき音紡ぐ

路味噌や故郷日々に離りゆく

ほどほどの身すぎ世すぎや豆の花

品性は高く持つべし目刺焼く

逃水やアインシュタイン舌を出す

# 当月集

安立 公彦選



○ 竹内慶子

のんちゃんほどの雲に乗る春の空

うまごやし食む馬の背に日照雨

花水木耳たぶ紅き少女かな

別るるや片栗の花ただに揺れ

顔色を変へぬ男や利休の忌

○ 府川昭子

せせらぎに耳傾けて猫柳

うぐひすや土の香のこる備前焼

俎板にあまたの疵や百千鳥

初蝶にしぼし止むる箒の手

馬酔木咲く格子窓ある旧街道

○ 矢口笑子

祝宴の末席にゐてあたたかし

わけ有りの特売品や花曇

うっかりと忘れし財布春疾風

朧夜や書齋机辺の魔法瓶（池波正太郎記念文庫）

書きかけの原稿用紙帰る雁

○ 片井久子

沈丁の濡るる夜明けを夫逝けり

黄泉へ発つ夫に着せやる春袷

春暁や枢主治医に見送られ

辛夷咲くや骨壺の夫わが部屋に

春星や北の大地へ夫還す（故郷・北海道）

○ 松下千恵子

戦争も戦後も遠し落椿

犬ふぐり胸から先に歩く鳩

花辛夷妻籠の地図の菓子包み

陽炎や降りて子の押す乳母車

すれ違ふ煙草の匂ひ春の關

# 春燈の句

安立 公彦選

筍飯前夜の残り分け盛らる

口寂しまたしても汲む新茶かな

八十路ともなれば余生や花卯木

春愁やあまた兵士の征きし駅

海風に耐ゆる屋並みやしじみ汁

落剥のこて絵の竜や涅槃西風

幻の黒船見しや揚ひばり

春暁の湯殿のけむりのびやかに

春しぐれ寒くないかと気遣はれ

さざ波に影を並べし榛の花

苗木植うカタカナ長き札のまま

紅の伊達衿合はず春裕

よき便り出窓の上のフリージア

送別のことばを包む春の宵

渋滞の車の列や菜種梅雨

稚児の列落花の雪に踏迷ひ

神鹿の眸のうるみたるさくらどき

たをやかに夜目にも由々し大ざくら

旧び家を代々守り立つや松の芯

梅まつり雨に降られてしまひけり

村おこし梅百本や花は葉に  
喪の一年野焼きの煙流れゆく  
たはむれに砂に書く字や春の海

東京 劍持 信夫

東京 山川 好美

桜東風祠に供ふ酒小瓶  
春闌くや白秋の碑に寄りて触る  
父の忌やさくらさくらの日和郷

城ヶ島海鳥競ふ春しぐれ

雛の日を厨に酔の香溢れさす

水音へ近づく山路藪椿

白木蓮朝の光を透かし浮く  
フリスビー追ふ犬疾しうまごやし

埼玉 中里よし子

東雲のあかるさにある春障子  
宮参り済みて菜の花月夜かな

力溜溜め千年の大桜

待つひとのあるかに雁の帰りけり

人生は選択ならず受難節

淡路より直送のこの桜鯛

我が庭の一株のみの諸葛菜

熱唱のテナーは牧師復活祭  
竿売りの路地に入りくる五月かな

東京 増田 大

大阪 井上昭太郎

京都 伊藤 さち

静岡 徳永 辰雄

東京 横山さくら

千葉 吉村さよ子



# 余言

安立公彦

録音の鶯を聴く児童館

戸辺 信重

街なかの児童館。「みなさんこの鳴声は何という鳥ですか？」若い女の先生が質問する間もなく、子供たちは一斉に手を挙げる。窓の外には春の日を受けて高層ビルが、しのかしのびやかにその光を返している。今こういう風景は、どここの街でも見られよう。

作者は個々の子供たちの表情に立ち入ることなく、その子らを含む「児童館」という課外学習の情景を、みごとに表現している。まさに現代俳句の一こまである。

折しも四月、例え録音であっても、この「鶯」には充分な季節感がある。

のんちゃんほどの雲に乗る春の空

竹内 慶子

『ノンちゃん雲に乗る』という長編童話集が出たのは、六十年ほど前になろうか。著者の石井桃子さんは、昨年四月惜しまれつつ逝かれた。百一歳。作品は版を重ね、作者もその何版かを子供ごころに熱中して読んだことだろう。ある日ふと空を見上げる作者。その空に白い雲が浮かんでいる。そう言えばむかし『ノンちゃん雲に乗る』という童話集があった、と思う次の瞬間、思わずこの句が口をついて出て来た。一句の出生とはそういうものである。

しかし一句に引用する作品名は、充分な吟味を要する。誰でもが知っている本であっても、自ずと篩にかけられるのは当然のこと。

この句の上五中七はその条件を良く満たしている。何よりも、そういう「評」をこえた大らかな読後感がいい。

黄泉へ発つ夫に着せやる春袷

片井 久子

近頃投句の中に、伴侶を亡くした句をよく見る。その作者はほとんど女性である。この句、「春袷」が作者の思いを良くつないでいる。

普段着物を着ることの多かった故人であろう。「着せやる」に作者の故人への思いが感じられる。淡々とした表現ゆえに、作者の内面の思いの深さが一句に揺曳する。

採血の針より逸らす目に桜

川崎真樹子

採血を受ける際、男性はその針先を見、女性は目を逸らすことが多い。私も毎月、或る数値を測るため採血している。ずらりと並ぶ左右の患者を見てみると、右に述べたことを実感する。

この句、場所はかかりつけの医院だろうか。「目に桜」の五音で、目の前がパッと明るくなった気がする。作者はまだ（昔はもうと言った）五十歳代の前半。表現にも「若さ」が感じられる。

ゆり椅子を立てばゆるるや花の午後 莊司 正代

こういう句を見ると、俳句という文芸の可能性を思い持たせられる。作者は九十歳代後半。

この「ゆるるや」は、今まで座していたロッキングチェアのかすかな揺れである。同時に、それまでの閑静な部屋の空気を、自身の「立つ」という動きのために乱したという思いである。

窓に映る桜は今が見ごろ。静寂なしかしこころ豊かな生活の一シーンを見るような句だ。

牡丹の芽師の句に学ぶ矜持かな 大文字孝一

この「師」は佐藤信子さん。

過日『自註現代俳句シリーズ 佐藤信子集』の上梓を慶

び祝賀会が催され、大勢の方が見えた。その会で作者は司会の役をみごとに務め上げた。

一句の中に「矜持」という言葉が出てくる。

私たちは自分の句に対し、その句の出自が自らの詩想によるものという責任と自信を持つべきである。これは自立した俳人としての第一の姿勢である。

誌上でいい表現を見ると、すぐ自分の句に借りるという人がいる。そういう人はいつまでたっても、自分の句を身につけることは出来ない。

この佐藤信子さんの自註句集は、作品、文章ともに読み応えのあるものだ。まさに矜持の句集と言えよう。

青年のまだ新しき遍路杖 妹尾 貞雪

誰でも一度は、白衣を着て笠をかぶり、杖をつきながら遍路に身を置くことを思う時がある。しかしそれは思うのみに終るのが一般だ。

作者は香川の人。住いは札所の道中にあるのか。遍路の姿を見ることも多いのだろう。

幾組かの遍路の中に、一人の青年の姿を見た。遍路杖も真新しい。そういう青年が遍路に加わるのには、余程の事情があるのだろう。しかし「まだ新しき」により、作者の青年に対する思いも和らぐ。同時にこの句を見る私たちも、何かしら救われる思いがするのである。